

# 歴史・文化財



国指定史跡  
「宿毛貝塚」



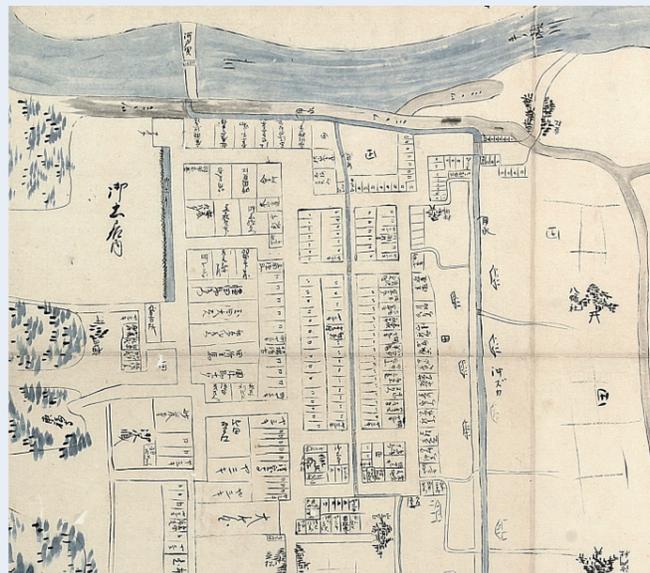
近代若衆宿の一種で現存する国指定文化財  
「浜田の泊屋」

## 連綿と続く地域のいとなみ

「宿毛」という地名は一説に、海辺に群生する葎が枯れた様子を、古来「すくも」と呼んだことに由来するといわれます。古文書での初見は鎌倉時代ですが、宿毛貝塚や曾我山古墳からわかるように、太古から人々がいとなみを続けて成長を重ねました。現在の高知県の西南域は元来、土佐国とは別に幡多国（波多国とも）があつて、のちに土佐一国になりますが、以後も異なる文化圏を育みます。宿毛湾、豊後水道をはさんだ九州との交流がうかがえるのも、この地域の特徴です。

## 国境のまちの成り立ち

戦国時代、土佐中村一条氏の繁栄と長宗我部氏の支配を経て、江戸時代になると宿毛一帯は、土佐初代藩主・山内一豊の姉・北方様の子から始まる領主が、土佐藩家老の立場で、代々駐在して独自性を保ちながら治めます。土佐、伊予両国を街道で往来する国境のまちとして、そして宿毛湾を防御する海防の拠点として発展し、なかでも三代領主・節氏の治世では、



宿毛領主邸宅「御土居内」を中心にした江戸時代のまち割り

土佐藩奉行・野中兼山の影響下で様々な事業が行われました。

その兼山は、土佐藩全域で土木事業や産業振興に指揮を執りますが、独裁的な手法に反発が集まって引退、さらに病死後、一族が罪人として宿毛の地で四十年間の幽閉生活を余儀なくされました。

兼山の宿毛での実績は、河戸堰や用水路、堤防の構築、沖の島と篠山の国境確定など多岐にわたり、宿毛の城下町風なまちづくりの礎となって、現代まで面影を残しています。

## 日本へ、世界へ、続く人材輩出

江戸時代から明治時代への激動期、坂本龍馬に代表される土佐にあつて、宿毛からも多くの人材が新しい時代に羽ばたきます。十一代領主・氏理や私塾を開いた酒井南嶺による先進の教育と、海防の鍛錬や海運業から導かれた先見力が実を結んだのでしよう。

北海道庁長官で札幌、旭川を整備した岩村通俊や、小岩井農場創始者の小野義真、自由民権運動から国会議員になった竹内綱、マリア・ルス号事件など人権問題に尽力した大江卓が先駆者です。

また、並んで国務大臣を歴任して宿毛の再開発にも取り組んだ林有造、姫路城を破壊から守った中村重遠、早稲田大学建学の母と慕われる小野梓、小松製作所創業の竹内明太郎、出版社富山房創業の坂本嘉治馬など、挙げればきりがありません。

そしてこの人材輩出の連鎖は昭和に入っても続きます。長期政権を担当して戦後日本の復興に大きな足跡を残した吉田茂や、その側近として国会議員を二十五年間続続した林譲治が世に出るのです。



小野梓（正面）、竹内明太郎（左）、坂本嘉治馬（右）の胸像が並ぶ小野梓記念公園



昭和三十年代の真丁商店街



宿毛を訪れた吉田茂